コロナ禍の日々に

（教育　昭和４２年卒）　東　山　弘　子

「草刈り機　エンジンかけに息切れる　体力落ちてもすること多し」　ある投稿コーナに載っていた男性の作品。農家の方だろうか、私と同年齢くらいの方かな？退職して２０年目、この方の気持ちがよくわかる。

退職してから、家庭菜園で野菜作りをしている。４月ごろから夏野菜を育て、９月からは秋野菜に変わる。その間、草抜き、施肥、土寄せ、収穫と年末まで作業が続く（多少大げさ）。野菜の成長がみられるのと、新鮮なものを食することができるのはうれしいことである。そうした日々の中で、比較的ゆっくりできるのが１月から３月くらいだろうか。

昨年の初めからコロナ感染症が拡大し、不安な自粛生活を強いられた。そんな時、高校時代の同級生から「つるし雛を飾ったから見においで」と誘いを受け、友人と共に訪問した。部屋いっぱいに飾られたつるし雛。這い子人形、おくるみ人形、草履、ネズミ等かわいく色とりどりにていねいに作られていて感動した。

つるし雛の一つひとつには子供の健やかな成長を願ういわれが込められていると教えてくれた。例えば「鳩」は「平和の象徴という縁起の良い鳥」のほかに水を飲んでも咽ることがないということから、赤ちゃんがお乳を一杯飲んで元気に育ってほしいとの願いが込められているという。早速、用意してくれていた縮緬の布で「鳩」を作ってみることにした。これがきっかけでコロナ禍の中でのつるし雛づくりが始まった。

作り方を教えてもらい、家で手作業を続けたがなかなかはかどらない。やっと２０個ほどの１セットが出来上がった。一つ一つ紐に通し、接着剤で固定していった。完成できたときはひな祭りの日はとっくに過ぎていた。それでも、家人にからかわれながら飾ると、部屋が急に明るくなった。しばらくこのままにしておこう。

自粛生活を強いられたからこそ作ることができたつるし雛。これからもコロナ禍のことを思い出しながら毎年飾りたい。